

新潟港

—東港区の二つの防波堤に迫る—

[取材現場] 新潟港東港区西防波堤、第2東防波堤 ※メールと電話による取材

[取材協力者] 若山 洋一氏 (新潟県交通政策局港湾整備課)

本記事の対象は、新潟港東港区内に位置する第2東防波堤および西防波堤の二つの防波堤です。通常の学生連載記事「立ち入り禁止! —土木構造物の裏側—」とは異なり、今回は防波堤に立ち入り禁止措置を施す難しさ、および釣り場として開放する難しさとその際の安全性の確保に向けた努力をお伝えします。

——西防波堤と第2東防波堤の現状を教えてください。

まず西防波堤についてです。防波堤の全長は3344mと非常に長く、危険が潜んでいるため、常に全面立ち入り禁止です。しかしながら、釣り目的で侵入しようとする人が後を絶たず、これまで入り口に有刺鉄線や柵を設置するなどの数々の対策をしてきました。ですが、そのような対策をしてもたびたび破壊され、再度修繕するといふ、いたちごっこ状態が続いているのが現状です。

それに対して第2東防波堤の全長は800mで、部分的に釣り場として開放されています。釣り場の運営管理はNPO法人が行っています。釣り場は、台風等により施設や備品が破損することもあるため、それに伴う破損箇所や、釣り場の閉鎖による利用料収入の減少に悩むこともあります。

——西防波堤では、

これまで幾度も立ち入り禁止強化措置を行ってきたということですが、その具体的な内容を教えてください。

当初は現在よりも低い鉄製門扉や消波ブロック上の有刺鉄線柵等を、防波堤の入り口に設置していました。しかしそれらが破壊されて侵入が続き、死亡事故等も発生したため、強化措置として2013年に入り口から約50m先にも門扉を設置しました。そして入り口の門扉も、より高さのあるものに2017年に取り換えました。

しかしこのような強化措置を行っても、釣り人の侵入はゼロにはなりません。そのため、立入禁止の看板等の



写真1 西防波堤入口門扉 (提供: 新潟県交通政策局港湾整備課)

設置や、県ホームページでの周知をしています。さらに、海上保安庁および県警との合同パトロール(年1回)や、月1~2回の水域パトロール(3~11月)も行っています。ただ、釣り人の多くはあまり人目を気にせず侵入しようとするので、立ち入り禁止対策はなかなか難しいのが課題です。

——第2東防波堤は釣り場として開放しているということですが、その開放に至った経緯を教えてください。

事の発端は、2008年に起きた、近隣の港の防波堤での釣り人転落事故でした。この事故の後、港湾施設の立入規制と開放の両面から釣り対策を検討するため、9人の有識者からなる「港湾施設における釣り問題研究会」が2009年に設置されたのです。その研究会によって、本当に危険な箇所を除いて部分的な開放を目指すことが適当である、ということが報告されました。そこで第2東防波堤の一部が釣り場として開放する候補となりました。そして、開放に向けて2010年に2度の試験開放を行いました。いずれの試験開放も、ライフ

ジャケットの着用を義務付けるなどの十分な安全対策を行いながら実施しました。1度目の試験の参加者は216人で、参加者へのアンケートでは9割以上が釣り場に魅力があると回答し、危険だという回答は皆無だったので、釣り場の魅力と安全性を確かめました。その後2度目の試験では、運営体制、閉鎖基準、料金、規制等の、管理者と利用者間のルールづくりを検証しました。このようなことを経て、無事に本格開放ができました。

—— 釣り場として開放することには危険が伴うと思いますが、どのようなことに留意しているのでしょうか。
十分な安全対策を施し、利用者の安全を確保できるようにしています。まず危険な事故が起きないように、危険箇所には立ち入らないという趣旨の看板を設置する他、周囲の状況を監視する人が常にいるようにしています。そして、万が一落水事故が起きても救助できるように、浮輪、救助用ボート、はしごを常備しています。また、気象が急変した際の避難や救助体制も整っています。



写真2 第2東防波堤（釣り場）入口付近注意看板（提供：新潟県交通政策局港湾整備課）



写真3 釣り場に救命浮輪の常備（提供：新潟県交通政策局港湾整備課）

振興モデル港」として国土交通省から指定されたことが1番のアピールポイントです。十分な安全対策が評価され、また釣り場による地域活性化が見込まれ、指定されました。今後は、地域の活性化やマリインレジャー人気の高まりという観点から、全国的に港湾施設の一部を開放する動きが進むことが予想されます。そのような動きが広まりつつある中で、モデル港として、安全な港を維持したいです。

お話を伺って

港湾という危険が潜む場所を、一般開放する難しさを痛感しました。そして、一般開放を実現しているモデル港の先駆的な安全対策を知ることができ、非常にためになりました。この度は取材にご協力くださり、誠にありがとうございました。

（担当編集委員：田中万琳、益田裕太）